

## 《研究ノート》

### トウモロコシにたどりつくまでに

—青森県岩木山麓における嶽キミの産地形成過程について—

金子 守 恵\*

はじめに

青森県岩木町岩木山の山麓に位置する常盤野地区は、嶽キミ（だけきみ）とよばれるトウモロコシの産地として名高い。嶽キミは、寒暖の差のはげしい高冷地で栽培されているために、甘味の強いトウモロコシに育つ。トウモロコシの大産地のひとつである北海道の市場でも、嶽キミは糖度の高いトウモロコシとして販売されている。

常盤野を構成する6つの集落のうち、M、K、Dの3集落で嶽キミが栽培されている。この3集落はいずれも開拓集落であったが、入植の時期やその経緯、嶽キミを栽培する以前の主たる生業や栽培作物がまったく異なっていた。

この論文の目的は、異なる入植背景をもつ3つの開拓集落が常盤野という地域に定着してゆく過程を、常盤野が嶽キミの特産地となっていく過程に重ね合わせて描き出すことにある。さらに嶽キミの産地化をめぐる人々の営みを、近年日本の農村でさかんにおこなわれている地域おこしのひとつとしてみることを通して、地域おこしにおけるシンボルの意義と日本の農山村で地域おこしが活発化している現状についての考察を試みる。

1996年10月26日から1997年11月30日までの間に、断続的に66日間調査をおこなった。特に50～80歳代の住民（のべ100人以上）を対象に入植からの常盤野地区の変遷を中心に聞き取りをおこなった。なかでもM集落のSさんからは詳

---

\*かねこ もりえ、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

細なライフヒストリーを聞き取ることができた。彼は、入植してから20年以上にわたってM集落の開拓組合長をつとめ、常盤野で最初にトウモロコシ栽培をはじめた人物である。入植の経緯、トウモロコシの導入などについてはSさんからの聞き取りによるところが大きい。

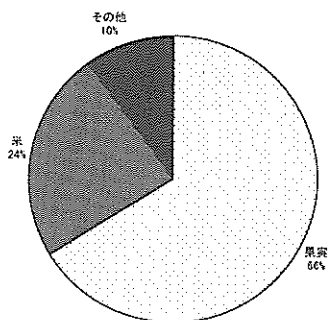


図1 岩木町農業粗生産額割合1990  
(岩木町『統計でみる町の姿』より作成)

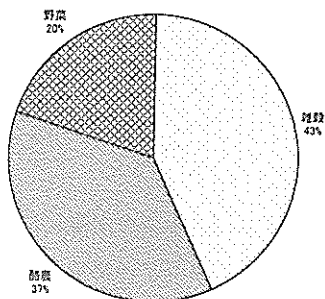


図2 常盤野農産物1位部門別農家数割合  
1990 (『世界農林業センサス』より作成)

常盤野地区のある岩木町は、1990年時点で人口12,558人、第1次産業就業者が全体の50%を占める。岩木町の農業は津軽地方に典型的なリンゴと稲作を中心とした農業形態である(図1)。一方常盤野地区は、リンゴや稲作ではなく、雑穀・豆類、酪農、野菜といった作目に特化している(図2)<sup>1)</sup>。

## 1. 「嶽キミ」以前の生業

嶽キミを栽培する3集落のうち、M集落は1949年に樺太からの引き揚げ者たちが入植した。K集落の土地は弘前在住のF氏の個人所有で、1933年に土地不足に悩んでいた津軽地方の農家の次男や三男が小作人として入植した。D集落には、1962年に国営パイロットファーム事業を契機に、岩木山麓の周辺集落か

1) 1970年以前、常盤野の米の反収は岩木町の中心部の半分以下で、米づくりには不向きな環境とみなされてきた。11月から翌年の4月までは2mを越える積雪がつづくため、岩木町の主産業のひとつリンゴづくりにも不向きな環境とされてきた。

ら相続する土地のない次男や三男が入植した。K、Dの2集落が入植後も青森県内の母村との社会関係を維持していたのに対し、M集落は青森県内には地縁や血縁をもたない「よその」の集団であった。

M集落の人々は、入植直後から稲作、畑作、そして冬期には他の集落に先がけて出稼ぎをおこなっていた（図3）。彼らは、ダイズ、ナタネをはじめとして20種類以上にもおよぶ作物を試行錯誤をくりかえしながら栽培してきた。60年代からは酪農にも取り組んでいる。K集落の人々は、入植時から一貫して稲作に取り組み、冬期は地主から

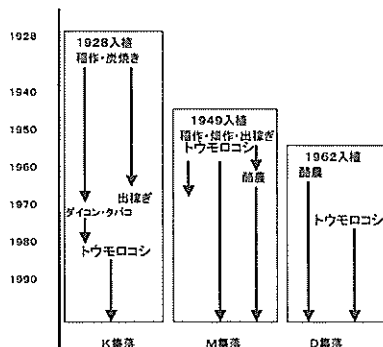


図3 K、M、D集落生業年表（聞き取りより作成）

木を払い下げてもらい炭焼きをおこなっていた。しかし、減反政策が施行され畑作物への転換がすすんだころから出稼ぎをはじめている。D集落の人々は、入植時から1970年に至るまで協業組織で酪農経営をおこなっていた。その後、個人経営に移行するが、現在にいたるまで半数以上の農家が酪農を続けている。

このように3集落は入植の経緯、その後の生業や作物の選択などの面で相違点がみられるが、なかでもM集落の違いはきわだっている。彼らは他の2集落に先がけて農業機械を導入したり、人を雇って田植えをするなどこれまで常盤野ではおこなわれてこなかったことに取り組んできた。嶽キミというトウモロコシの品種を最初に栽培し始めたのもM集落の人々であった。

### 1-1 帰る場所のなかった人々

1948年5月、約40戸288人の人々が、樺太真岡郡清水村から引き揚げ船千歳丸で北海道に帰ってきた<sup>2)</sup>。親戚など頼る先のなかった16戸は新たな入植地を探

2) 第二次大戦後、樺太に残された約40万人の日本人は旧ソ連の占領下で拘留生活をおくった。樺太からの引き揚げが開始されたのは戦争が終わって約三年後のことである〔中尾、1983〕。

さなければならなかった。そんな時青森に引き揚げ者を収容する施設（引き揚げ寮）が完成したという連絡が入り、彼らは青森へ向かう。彼らは入植地の選定に約1年を費やし、最終的に中郡の岩木町常盤野地区を入植先に決めた<sup>3)</sup>。

国は入植時にM集落全体に100haの国有林を払い下げた。その後、男性だけが入植地に入り寝食をともにして共同開墾をおこない、女性は引き揚げ寮で生活をつづけた。2年後約6haが開墾された<sup>4)</sup>。青森県開拓課が開墾地と未開墾地の区画を決定し、くじ引きによって1戸あたり37aの開墾地と5.63haの未開墾地が割り当てられた。

その後、各世帯は夫婦2人の労働力を中心に、開墾と作付けをすすめた。当初人々は常盤野の気候や土壌の特性もわからないまま、その多くが樺太での農業経験を基に畑作を重視し、農作物を売って生計をたてることを志向した。彼らは樺太では1戸あたり5ha以上の耕地を所有し、ビート、エンバク、グリーンピースなどを大規模に栽培する商業的農業をおこなっていた。

彼らが試行錯誤を繰り返しながら常盤野に作付けした作物は、ダイズ、エンバク、アズキ、ナタネ、ジャガイモ、ソバなど20種類以上にのぼった。最終的には、高収量で価格も高かったダイズ、ナタネ、アズキを栽培するようになった。彼らによれば、イネは収量が低いため自給用以外に商業的な目的で積極的に作付けする人はいなかった。

収穫後、彼らは自ら農作物を売り歩かなければならなかった<sup>5)</sup>。Sさんは入

- 3) Sさんによれば、当時東北地方では満州引き揚げ者や相続する農地が不足した農家の子弟を対象にした緊急開拓がはじまって2年ほどたっており、条件のよい土地は入植が決まっていた。入植地の選択と決断は長老を中心とした4~5人でおこなわれたが、Sさんは36歳という若さでこのメンバーに加わるだけでなく開拓課の人と交渉したりするなど中心的な役割を担った。常盤野地区には、県道が通っておりまた農業に欠かせない小さな沢が数多く流れていて、それが決め手となった。
- 4) 100haのうち40.8haは防風林で、実際の耕地面積は1戸あたり3.7haであった。開墾作業は人力でおこなわれた。まず木を切り倒し土中の石を取り除き、その後木の根を2~3年放置し腐り始めたところに掘り起こした。当初は放置された切り株のあいだに作物を植えた。開墾は1年間に2人で30a開墾できればよいほうであった。 $(15a \times 20(人) \times 2(年間) = 600a)$ 。
- 5) Sさんが個人的に見つけた出荷先に周りの農家と一緒に出荷させてくれるように頼みに行くことがしばしばあった。こうしてM集落全体の作物の出荷先は次第に決まっていた。たとえば小豆は、満州引き揚げ者経営のO製菓店が他より高めに買い上げてくれるのですべてそこへ出荷していた。

植後すぐに岩木町農協に理事として加わり、畑作物を扱うことを提案したが、リンゴと米を重視していた農協は、作付けの少ない畑作物を取り扱ってはくれなかった。

収穫と出荷がおわると10月ころから積雪のため農作業ができなくなり、男性たちは県外に出稼ぎにでかけた。彼らは、出稼ぎで得たお金を生活費にあてるだけでなく、土地を借入・購入するための資金にもした。Kさん（60歳代）は出稼ぎにゆくたびに土地が増えていった様子を次のように語ってくれた。

「(出稼ぎ先の)北海道で11回正月をすごしたよ。兄貴と一緒に家に電話とかするだろ、そうするとおやじが『おい、また土地を借りたぞ』っていうわけさ。それを聞くたびに兄貴と一緒に『また土地を借りたのか(ため息をつく様子)』っていついたのさ」

M集落の入植時には、K集落に放棄された水田がたくさんあったという。彼らは出稼ぎで得た資金でこれらの水田を借入もしくは購入している<sup>6)</sup>。たとえばSさんは1951年時点で開墾地37aを所有していたが、その上に水田80aを借入し、その後1960年に新たに1.5haの土地を購入した。1965年には集落内で離村した人の土地5haを購入、1970年にはK集落の人が放棄した水田10haを借入している。

## 1-2 常盤野に残った人々

M集落の戸数は、1964年以降、毎年1〜2軒ずつ減少するようになった。この年、国は離農助成法を施行し、離農をきめた農家1戸あたり補助金50万円を支給した。これは農業基本法の主旨に従って、小規模農業を大規模な集約農業に変えることを推進するものであった。Sさんによれば、当時は常盤野で4haの

---

6) 土地を購入借入する一方で、女性は副業的にニワトリやブタを飼育したり、冬期は炭焼き用の俵を編んで日々の生活を支えていた。当時の様子を知る女性、Mさん（70歳代）は、卵を売り歩き、食費や学校に必要な費用などにあてていたという。

農地を1万円程度で購入できた。50万円は破格の補助金であった。

M集落において離村者が生じた背景には、当時の畑作中心の農業に商業的な見通しがたたなかったことがあげられる。またそこには、機械化がすすんだことで農業をつづけるために現金が必要になったことも影響していた。1955年から急速に小型トラクターが普及しはじめ、M集落の中でも当初出始めたばかりだった7馬力の手押し式の小型耕耘機を購入する世帯がでてきた<sup>7)</sup>。

これに加えて、出稼ぎをやめて酪農をはじめるという新たな選択肢が与えられたことも離村に拍車をかけた。1962年には、岩木高原を対象に国営パイロットファーム事業が開始され、酪農への転換がすすめられた<sup>8)</sup>。当時M集落ではほとんどの男性が冬のあいだは出稼ぎにでていた。彼らが酪農を始めるか否かは生業への選択のみならず生活する場所を選択することでもあった。

M集落の人々は、自らが置かれている状況を自分自身で判断し、可能な選択肢のなかで決断しなければならない場面にしばしば遭遇した。Kさんはそのような時いつもSさんの家を訪れ、彼自身の決断を聞きにいった。しかし、それはあくまでもKさんが決断をくだす際のひとつの情報を得るためであったという。Sさんによれば、生業の選択について自らの決断を語ることはあっても、積極的に人に何かをすすめることはなかったという。

常盤野に残って農業をつづけることを選択した者は、国営パイロットファーム事業を契機に、酪農を生業の一つとして取り入れていった。命の危険をともなう土木工事にし出稼ぎに従事するよりは、少額でも定期的に現金収入のある酪農が選ばれたと、当時を振り返る人は多い。しかし、1戸あたり乳牛5頭からはじまった酪農経営は、その後、牛の多頭化や設備投資、乳価の伸び悩みや飼料価格の高騰で、大きな負債を抱えることになる。

常盤野に残ったM集落の人々は、耕地面積を拡大しつつ、常盤野で農業を行って生活基盤を確立してゆくために、積極的に新しい農業の要素を取り入れて

7) 『日本農業100年のあゆみ』p. 246, 図 6-3。

8) 大規模な酪農経営をめざし、国は北海道、青森、長野、兵庫、大分を選定しパイロットファーム事業を実施した。

いった。そのなかのひとつがトウモロコシであった。

## 2. トウモロコシ栽培のひろがり

### 2-1 はじめは3畝から

嶽キミのはじまりは、M集落のSさんが畑の一角に試しに植えてみたクロスバンタムという、聞き慣れない名前の品種だった。

Sさんは、入植して6年後の1955年に、弘前の種苗店からこの品種を紹介された。当時彼は、在来の食用品種であるモチキミと飼料用のデントコーンを栽培していたが、クロスバンタムという新しい品種のくわしい栽培方法も知らなかったし、収穫しても確実に販売できる自信もなかった。当初はこの品種を栽培することを躊躇していたが、先の種苗店が収穫したトウモロコシを販売することを約束してくれたので、畑の一角の3畝(3a)ほどのところに種を蒔いた。

Sさんが新しいトウモロコシの可能性を予感したのは、栽培したトウモロコシを口にして、モチキミとは異なる味覚(特に甘味)に気づいたときであった。彼は妻と二人だけで4年間このトウモロコシの栽培をつづけ、常盤野で十分栽培できると確信してからM集落内だけでなく他の開拓集落の人々にもすすめた。

しかし、問題はこのトウモロコシを売るための販売先であった。そのころ材木の仲買人であったRさんが、M集落の人から材木を買い入れた機会にSさんを訪れ、彼の栽培したトウモロコシを知るところとなる。Rさんによって、弘前市の商店街で直売されたり、スーパーマーケットに持ち込まれた新しいトウモロコシはそれぞれの売り先で評判の一品となっていった。Sさんになって栽培をはじめた人々は、彼と共に少しずつこのトウモロコシの栽培面積を拡大していった。

その後、評判を聞きつけて、Rさんの他にも仲買人がM集落を訪れるようになった。仲買人Kさんとトウモロコシのつきあいは、知り合いの仲買人が弘前市で、完売する事ができなかったトウモロコシをあずかったのがはじまりであった。彼女は青森市に販売先を求め、偶然にもF地区で5軒の「ゆでキミ(ゆ

でたトウモロコシ)」の屋台に売りさばき、同時に大量の注文をとることができた。幸運なことに屋台の人たちが取引していた農家では収穫のピークが終わり、トウモロコシの入荷量が少なくなっていたのである。このようにして、仲買人が販路の開拓につとめた結果、1965年までには小規模ながらもいくつかの販路が確立していった。

常盤野のトウモロコシが商品として評価されるにつれ、M集落の人々はトウモロコシ栽培に適した常盤野の自然環境を、次第に強く認識するようになった。たとえば、朝晩と日中の寒暖の差が大きいため甘味の強いトウモロコシが栽培できること、高冷地ゆえに収穫が他の地域よりも遅れ、出荷の時期をずらせること。またトウモロコシに害虫がつきにくいという利点もあった。酪農を経営していたことも有機肥料を確保するという点で大きな利点となった。

1970年頃Sさんは、嶽キミの噂を聞きつけて彼を訪ねてきた、岩木山麓北西に位置するN集落の開拓組合長にトウモロコシの種を渡し栽培方法をおしえた。しかし、堆肥の不足が原因でN集落のトウモロコシ栽培は失敗してしまった。岩木山麓の土壌は連作障害をおこしやすく、加えてトウモロコシは土壌の肥沃度に関して収奪性の高い作物であるため、有機肥料を施さないと畑は4~5年で肥料切れをおこしてしまう。現在常盤野では、酪農経営をしていない農家は、10aにつき4~5万円分の堆肥を購入して施肥をしている。

そうしたなかで、販路を最初にひらいてくれたRさんが1960年に亡くなると、他の仲買人が結託して安い値段でトウモロコシを買いたたくようになった。これを契機に、Sさんは、様々な場所へ出向いてトウモロコシを仲買人を介さず直接売り始め、M集落の人々もこれにつづくようになる。たとえば1965年頃、岩木山頂へむかう山道の入り口で屋台を開いてゆでキミを売ったり、岩木山麓の温泉街の商店に販売を頼んだり、岩木町や弘前市の路上で販売するようになった。このような努力の結果、常盤野のトウモロコシはしだいに有名になり、嶽キミとして知られるようになった。



## 2-2 日本農政の変化

嶽キミの栽培が3集落にひろがりはじめた1975年から1980年は、日本の農業政策が米の増産一辺倒の指向を改め、選択的な農産物の生産に転換しつつあった時期である。また第1次産業と他産業との所得の格差が一段と大きくなった時期でもあった。

### 2-2-1 酪農経営をめぐる変化

パイロットファーム事業によって入植したD集落は、集落全体で145.6haの土地と成牛107頭を所有し、1日あたり625kgの牛乳を1升65円の契約で乳加工業者に販売していた。

青森県における乳用牛飼育の戦後の動向を見ると、1戸あたりの乳用牛の飼育頭数が年々増加している一方で、1965年を境に飼育戸数は減少している。このような多頭化と飼育戸数の減少の理由として、1) 物価水準、生活水準の上昇のために収入の増加を急がねばならなかったこと、2) 乳質改善の要請が強まったことにより設備投資が必要になったことの2点があげられる〔青森県地域社会研究所編、1986〕。青森県では、多頭化によって乳量は増加する一方で、飼育管理に当てる労働力の不足を補うために設備投資をおこない、多額の負債を抱えるようになった。1970年代にはいと、多頭化がすすめられた結果、乳生産量が飲用牛乳の消費量を上回るようになった。

このような時代背景のもとで、D集落では酪農生産による収入が計画どおりに見込めなくなっていった。1968年に協業体制がくずれはじめ、1970年には、完全に個人経営となる。このとき個々の農家は莫大な負債を抱え、引き続き酪農をおこなうか、それとも酪農以外の生業を模索するのかを決断しなければならなかった。最終的に個人経営に移行したときに、酪農をつづけることを選択したのは、全14戸のうち10戸で、残りの4戸は畑作に切り替えた。個人経営に移行すると、嶽キミ栽培は有望な副収入源として口コミでひろがっていった。

### 2-2-2 稲作経営をめぐる変化

1957年に発行された最初の農業白書にあたる『農林水産業の現状と問題点』には、日本経済の国際化、貿易の自由化に備えて我が国の農業をもっと生産性

の高い農業に転換させる必要性が強調されている。

1961年には農業基本法が成立し、畜産や果樹、野菜など、需要の増大が考えられる部門を選択的に拡大することや自立農家の育成のため協業を推進したり、農業以外の産業への就業機会を増大することなどをもちこんだ政策がとられることになった。貿易自由化が本格的にすすめられるなか、ムギ類、ダイズなど一部の農作物栽培が衰退していき、選択的に農産物を栽培していったことで、農家が農産物を購入しなければならないという状況も生じた。農家の生活はいっそうカネのかかるものとなった。その一方で主食である米の栽培については、国家の資金を投入して食糧の増産がはかられ、1967年からは米の流通や価格は国家の管理のもとにおかれることになった。日本の米は、主食として国から特別な待遇をうける特殊な作物となった。

こうした状況のなかで、常盤野では1955年ころから水稻栽培が導入された。反収も次第に上昇し10aあたり7~10俵と岩木町の他地区と大差なく米を収穫できるようになった。その理由としては、寒冷地用の品種や温床による苗栽培が普及したこと、さらには農薬が普及し害虫駆除が容易になったことなどがあげられる。

1967年以降、食糧不足の時期に構想された大規模な水田造成事業がようやく完成したこともあって、日本の米の生産量はわずか6年間のあいだに900万tから1300万tまで増加した<sup>9)</sup>。その一方で、食生活の変化によって一人あたりの米の消費量は1962年には118.3kgであったのが、1970年には95.1kgにまで減少し、このころから米余りが問題になりはじめている。そして、1970年に米の生産調整（減反政策）が実施されることになる。

Sさんによれば、新聞ですでに減反政策の報道がながれていたにもかかわらず、役場がノルマをはたすためにM集落の農家に開田を頼みに訪れていた。それからまもなくして今度は同じ人が岩木町全体の減反を常盤野で消化するように頼みに訪れた。

---

9) 『日本農業100年のあゆみ』 p. 245, 図 6-1

M集落の人々は減反政策が施行されたのを機に全戸が一斉に米作りをやめてしまった。一方K集落では、稲作をつづけるものとやめるものに別れ、最終的に常盤野地区全体では約50haの水田のうち32haが減反され、残りの18haで稲作がつづけられた。M集落の人々は、水田の跡地を飼料作物の畑に転換し、酪農を中心とした生業を営むようになった。またこのときに出された稲作転換奨励金を使って大型機械を共同で購入した<sup>10)</sup>。

1975年、百沢の水害<sup>11)</sup>によって、K集落の人々が稲作に利用してきた水路が決壊した。それまで、K集落の人々は稲作のための水路を集落全体で管理してきたが、稲作をやめた農家にとって水路は生業とは切り離されたものとなっていた。水害後、集落全体で水路の修復をおこなうこともせず、やがて稲作はK集落からも消滅した。

稲作をやめたK集落の人々は減反政策後の目処がたたず、また水田の跡地で耕作しなければ補助金がおこななかったために、M集落の人に水田の跡地を借りてくれるように頼みにゆく。この時多い人でK集落の2～3軒の農家から計10haちかい土地を借りている。現在もM集落の人々は、このときに借りはじめた耕地で牧草や嶽キミを栽培しつづけている。

K集落の多くの人は、すぐには嶽キミ栽培に着手しなかった。嶽キミの商品としての知名度は徐々に高まりつつはあったものの、その出荷先は依然として限られた2、3人の仲買人だけであった。彼らが嶽キミ栽培をはじめるのは、役場や農協がすすめたタバコが想像以上に肥料代や手間がかかることがわかったり、ダイコンの連作障害がでて品質のよいものを収穫することがむずかしくな

---

10) 稲作転換奨励金とは、稲作以外の作物に取り組もうとするグループに機械の購入や作業小屋などの建設費用のうち50%を支給するものである。M集落の4戸とK集落の2戸（後に抜ける）は共同でこの補助金を申請し、55馬力のトラクター2台を購入し車庫を建てた。耕地面積は増やしていくことができるからという理由で、費用は耕地面積の大きさにかかわらず平等に負担した。共同購入の中心的な役割を担っていたM集落のK氏によれば、その後も計画的に機械を増やし、1993年にはトラクター以外に7台の農業機械をそろえた。

11) 1975年8月6日午前3時ころ蔵助沢の土石流が中郡岩木町百沢集落を急襲した。死者22人、重軽傷31人、家屋全半壊26戸、局地災害としては青森県水害史上未曾有の大惨事を引き起こした。

る1980年代以降のことである。

### 2-3 嶽キミ栽培の拡大

M、K、Dの三集落で栽培されはじめた嶽キミは、1980年代に入っても他の作物と比較するとその栽培面積は依然として少なく、栽培面積の年変化がはげしいことも特徴的である（図4）。このなかで、1970年代後半から1980年代前半にかけて、農協経由の出荷をめざし、共同で嶽キミを市場へ出荷する人々があらわれた。

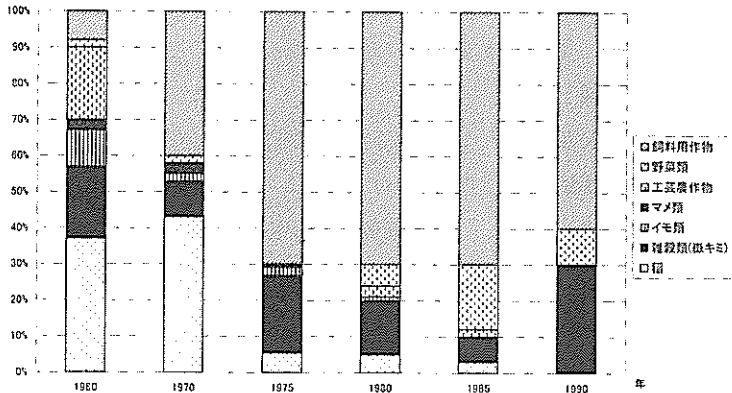


図4 作物種類別収穫面積（常盤野）（『世界農林業センサス』より作成）

1981年、酪農組合の組合員で嶽キミを栽培していた5軒の農家は、農協を通じて出荷するルートを確認するための説得材料として、嶽キミの計画的な出荷を試みた。

安定した価格で嶽キミの大口出荷先を探していたD集落のHさんは、何度か農協に出荷を依頼していたが断られてばかりであった。Sさんも農協の理事時代、何度か嶽キミの市場出荷を提案したが、農協は常盤野の農家がかつて価格が下がると栽培自体をやめてしまったことを理由に首をたてにふらなかった。

Hさんは、リンゴ農家をしている兄の紹介で青森県経済連合会の野菜担当者Iさんに出荷の手助けを依頼し、Iさんの個人裁量で市場出荷が実現した。一

日目、10ケース（100kg）の嶽キミをのせたトラックは、東京の太田市場、仙台の青果市場では売れず、最終的に福島の青果市場で1ケース（30本）2,500円で売れた。当時してみれば高い値で、Hさんは10日間出荷をつづけた。その後実績をあげた5軒の農家は、1982年、農業普及所の人とともに再度農協にかけあい、最終的に当時農協のリンゴ係長だったMさん（現組合長）の裁量で、農協を通した出荷が決定した。初年度は8万本、その後出荷量は毎年倍ずつ増加していった。

このような急激な出荷量増加の理由として、岩木農協がリンゴの出荷を通して全国の市場と交流があったこと、嶽キミの出荷時期が他産地のトウモロコシとずれていたこと、そしてなにより他と比較して甘くておいしいトウモロコシであった、ということが指摘できる。1983年、「岩木高原野菜生産組合（現岩木高原野菜協議会）」が設立され、はじめて嶽キミを通して3集落を1つにまとめる組織が誕生した。

これを契機に、農家は嶽キミの栽培面積を拡大していった。1985年から1990年にかけては3倍以上（図4）、農協からの聞き取りでは、1997年時点で農協への出荷分だけでも120haにおよんでいる。こうして嶽キミは常盤野の農家の主要な農産物となり、リンゴ農家に負けず1シーズンに1千万円以上稼ぎだす農家もまれではなくなった。

集落をこえた農家の連携は、農協出荷を実現し、さらには嶽キミの産地化を導いた。しかし、利潤追求のためだけに集落をこえた連携が実現したわけではないだろう。常盤野の3集落は、集落自体、また集落間の歴史も短い、短いなかにも組合を通した共同の場があった（図5）。年に一度の水路掃除、水田のしろかきのための農業機械の貸借、酪農組合主催のレクリエーション、減反の割り当てを決める寄り合い、放棄した水田の貸借、それらが嶽キミの産地化の際に、常盤野の人々に共通の経験として還元され、人々の共同を裏面から支えたと考えられる。

また集落をこえた社会関係には、常盤野小中学校の生徒として共に学んだという経験を通して築かれたものもあったと考えられる。現在常盤野に在住する

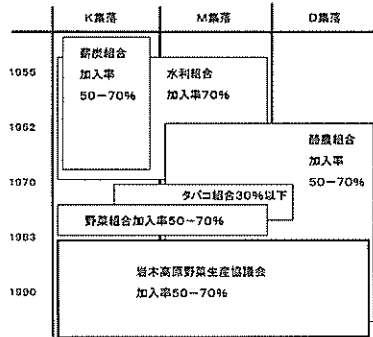


図5 生業に関する組合（常盤野）（聞き取りより作成）

61歳以下の人（1997年時点）のほとんどが常盤野小中学校の卒業生である。常盤野小中学校は地域のセンターとして重要な役割を担ってきた。毎年10月に開かれる学校の文化祭は、婦人部などが参加して地域の行事としてもおこなわれている。

入植一代目にとって常盤野は、新しいなじみのない場所であり、なにより自分たちは他集落の人々とは異質であると感じ続けていたと考えられる。しかし、2世代目にとって常盤野は生まれ育ち慣れ親しんだ場所であり、周辺集落の人々とは劇的に変化する農業政策のなかで試行錯誤しながらともに農業をしてきた仲間であり、また同じ学校の卒業生であった。

同じ土地でともに育った新しい世代は、変化の激しい社会環境のなかで、細々とではあったが常盤野で栽培されてきた嶽キミにこだわり、それぞれに創意工夫をかさねながら出荷先を模索した。その過程を経て常盤野は嶽キミの一大産地となっていったのである。

### 3. 考 察

#### 3-1 常盤野のシンボルとなった嶽キミ

常盤野が嶽キミの産地となった過程は、樺太からの引き揚げ者であるM集落の人々が常盤野に定着していった過程でもあった。彼らにとって定着のプロセ

スとは、出自や生業への志向をはじめとした彼らの異質なところを周辺集落の人々に認めてもらうことであった。彼らは、周辺集落の生活の仕方をまねるのではなく、樺太や北海道のような畑作中心の商業的な農業をおこない、自分たちの生活の独自性を高めた。

一方周辺集落の人々は、農政や社会環境の変化に直面してそれまでつづけてきた自分たちの生業を変えることを余儀なくされる。彼らは、自分たちの生活基盤の確立を模索するなかで嶽キミの栽培をはじめた。それは彼らが、社会環境の変化のなかでM集落の人々を「よそのもの」と認識するのではなく、同時代に常盤野で共に農業をおこなう者として受け入れはじめた証であったと考えられる。それを、更にはっきりと示したのが嶽キミ栽培の拡大であったといえる。

常盤野の各農家にとって嶽キミの栽培は、単に生産することだけでなく、彼らの生活の仕方を左右する選択であった。農家の決断は、栽培だけでなく販売にまで深く関与するという姿勢にもあらわれている。販売の過程において農家は、嶽キミに岩木山麓という場所のイメージ（雄大な岩木山の麓で高原の風にふかれて育つ）と堆肥で育った嶽キミ（食品としての安全性）というイメージをそえて戦略的に売り出していった。

このようなイメージを付与して嶽キミが売り出されたことによって、市場と消費者は嶽キミと産地を関連づけて認識するようになった。実際に市場では、嶽キミは「おいしい」トウモロコシの代名詞となり、他のトウモロコシと区別され、評価はそのまま価格に反映され高値がつくようになった。

常盤野が嶽キミの産地として有名になった背景には、古くから岩木山麓が県内外の人々に湯治場として知られていたという歴史的な側面と、近年の観光開発によって遊戯施設を提供する場所として認知されはじめているという現代的な側面がある<sup>12)</sup>。これらの観光地化政策で、嶽は温泉があるリラックスできる

---

12) 嶽は古代山岳信仰にちなんで名付けられたもので、特に1700年代に発見された温泉によって、周辺市町村の人々が農閑期に疲れを癒しにやってくる湯治場として利用されてきた。1972年から、嶽にいたるまでの道路が舗装され、その8年後には岩木町総合開発計画が開始された。現在ではゴルフ場、運動公園、ハンググライダー場、遊歩道、散策道などが整備されている。

場所というだけでなく、子供連れ家族などが遊びにやってくる行楽地となっていた。

嶽を訪れる人々にとって岩木山麓は、日常生活とはちがう生活時間がながれる場所と位置づけることができる。それは温泉にはいってリラックスすることであったり、運動公園でスポーツに汗を流すことであったり、岩木山周辺の散策路を歩くことなどであろう。嶽を訪れた人々は日々の生活とはちがう時間の過ごし方の中で、そこで嶽キミが栽培されていることを知りその場で食べることができる。

各農家が工夫して制作している直売店<sup>13)</sup>では、売り手だけではなく客も「嶽で食べるからおいしい」という言葉を口にしていて、取り立ては新鮮であるが、現在では保存方法が改善され少なくとも一週間は鮮度や糖度がおちない。「嶽で食べるからおいしい」という言葉からは、嶽を訪れた人々が嶽キミと自らの嶽での楽しかった経験を結びつけているようにも感じられる。このことは彼らが、常盤野を「リラックスしたり」「楽しんだり」「おいしいトウモロコシができる所」として肯定的に理解しはじめていると考えることができよう。

常盤野の農家にとって嶽キミは、その産地化にかかわる自らの歴史をシンボライズするようなものと考えられる。彼らにとって嶽キミは、高価格がつく「もうかる」商品作物となった。このことは、彼らにとって自らの努力が評価されたことであつたといえよう。嶽キミ栽培は、個々の農家が選択した結果であり、さらにそれぞれが工夫をかさねながら販路を確立したものである。つまり嶽キミ産地化の過程は、各々の農家が試行錯誤した過程と重ね合わせることができる。常盤野の農家は市場の評価や直売店での客の反応を、その年に収穫した嶽キミの評価としてだけではなく、過去に自らが嶽キミ栽培に踏み切った決断やその後の努力を肯定するもの、としても受け入れることができると考えら

---

13) 毎年8月から10月になると、運送会社の協力で道路沿い約10kmにわたり嶽キミの黄色い旗がたちならび、その旗のあいだに各農家が経営する直売店が20軒以上店を出す。店舗は、各農家が工夫して制作しているものがほとんどで、廃車を使っていたり、ビニールシートで大きな簡易小屋を建てていたりとその外観はさまざまである。



れる。たとえ嶽キミの栽培面積が少なく生計に占める割合が低い農家でも、産地化に貢献した嶽キミを栽培している、という強い自負が感じられる。

嶽キミが消費者に高く評価されたことは、開拓者たちに常盤野という場を肯定的に認識させる原動力となっていると考えられる。入植時、常盤野は開拓が入るような条件の悪い土地として周辺集落の人々に認識されていた。「米もリンゴもとれなくて」というのは、青森県内においてそこが非常に条件の悪い土地であることを表現したものだ。しかし、その条件の悪い土地で、彼らはトウモロコシを栽培して生活してゆくことを選択し、さらには常盤野をトウモロコシの一大産地にまで押し上げた。

開墾、作物の試行錯誤、販売先の開拓、出稼ぎ、農業の機械化、パイロットファーム事業、減反政策など、常盤野の人々は入植してからの短い間に数々の社会環境の変化に遭遇し、その変化の中で半数以上の仲間たちが常盤野の地を後にしていった。入植の経緯をインタビューしていた途中で、Sさんがふとつぶやいた印象的な言葉がある。

「いろいろ苦労もしたし、大変な思いもしたけど、ここはいいところだよ」

この言葉は、嶽キミが生活基盤を確立する作物となっていなかったら、聞くことができなかった言葉かもしれない。しかしひとついえることは、常盤野でしかとれない嶽キミの存在によって、彼らはその土地で生活できるようになっただけでなく、「米もリンゴもとれなかった」常盤野という場所で嶽キミをつくって生活する、という自分の生き方にさらなる自信や誇りをもつことができるようになった、ということではないだろうか。

### 3-2 地域おこしと常盤野の嶽キミ

常盤野の嶽キミは、近年さかんになってきた地域おこしのひとつの事例、として取り上げることができる<sup>14)</sup>。徳野〔1997〕は、地域おこしの特徴を以下の三点にまとめている。1) 経済活動の展開が活発で、生活文化活動が中心であ

った地域のコミュニティ運動と比較して、活動内容に総合性と経済性がある。2) 地域おこしは地域住民の自主的活動によって展開されているというテーマのもとに、行政の支援や事業化がすすんでいる。3) この活動は理論的な支柱や方法論的枠組みに自信があって演繹的に展開されているわけではなく、活性化に成功した地域の方法に着目してその手法を活性化事業として取り込んでいる。

活性化事業の中で近年注目されているもののひとつに、シンボル事業がある。この事業では村や町に関わりのある「もの」を取り上げ、それを村の人々が商品化したり他村と差異化を計って販売し収入源の一つにしたり、それを目玉にイベントをおこなって村外の人をよぶ。たとえば青森県T村は昔から稲作のさかんなところで、現在は有機米を栽培し他村の米と差異化をはかりそれを販売している。また年に一度有機米で巨大おにぎりをつくるイベントをおこない多くの人が訪れている。

地域おこしは方法論的枠組みが確立されていないために成功事例を模倣するかたちですすめられている。地域にある「もの」をさがしだして商品化したところで、実は他の地域でも同じ「もの」が商品化されている、ということは地方物産展などで目にするのである。またそれを見いだし商品化する過程においても、行政が中心になって活動して、その地域に暮らす住民たちは意外と関心が薄かったりすることも見られ、シンボルといわれる「もの」と人々の間の関わりあいには程度の差がある。

その一方で、大分県の一村一品運動のように、住民をあげて運動に力をいれ、その一品が村の人々と深い関わりをもち、さらに村の人々にとって確実な収入源となっているところもみられる。一村一品運動の視察にきた人々は「見てほしいといわれるところは遠くて、不便で、悪条件のところばかり」なのだとい

---

14) 地域おこし、という言葉は昭和55年大分県安心院町で全国の地域づくりのリーダーが集まって会合を開いたとき、それを報道したマスコミが使ったのがはじまりである。この言葉は、過疎に悩む地域への活性化のカンフル剤として全国に瞬く間にひろがり、今では全国の7割以上の自治体なんらかの形でこの運動を取り入れている【平松、1990】。

まってこぼすというのが、平松〔1997〕によればそういう悪条件のところだからこそ、住民をあげて一村一品運動に力をいれ現在の成果をあげている。

嶽キミを栽培し、一大産地にまで発展させた常盤野の農家は、戦後の引き揚げという緊急の状況下で、故郷を後にして新たな土地を求めた。入植地でのしごらみが薄かったであろう彼らは、生活する場所や職業に関してより自由な選択をすることが可能な状況にあったはずである。しかし、米もリンゴもできないような条件の悪い土地にとどまり、土地にあうものをもとめ、試行錯誤を繰り返すなかで嶽キミにたどりつく。このような背景をもつ彼らにとって、嶽キミとは経済的な成功をもたらしただけではなく、産地化に至るまでの彼らと嶽キミとの関わりあいの歴史を喚起するようなシンボルとしての役割を果たしているだろう。

村に生活する人々にとって、地域をおこすことは自分たちの生活する場所を見直して自然環境や地域固有のものを利用することであり、また都市の経済活動にも対応しながら生活することであろう。嶽キミ産地化の過程が現代の地域おこしという状況と類似してみえること。このことは、現在の地域おこしをめぐる人々の営みを、利益追求といった経済的な成功を求める過程としてだけではなく、その地域の良さやその地域に暮らす自分たちの生活を肯定的にとらえなおし、さらには物質的欲求の充足を中心とした生活とは異なった生活の豊かさやそれに対する誇りを正当化してゆく過程、として再評価する必要性を示しているのではないだろうか。

## 謝 辞

本論文を完成するまでに、数々の方の援助と助言をいただきました。ここに深い感謝の意を表します。フィールドワーク中には、常盤野の農家の方だけでなく、岩木町農協の職員の方、開拓事業に携わられた佐々木先生（弘前大学名誉教授）、郷土史家の柴田先生などにも話を聞かせていただきました。弘前大学人文学部の杉山祐子先生にはフィールドワークでのささやかな発見に耳を傾けていただき、さらには研究の方向性を導いていただきました。この研究が弘前大学人文学部旧人間行動コースのスタッフや諸先輩方による20年以上の研究蓄積から多くの影響を受けていることはいまでもありません。

また本論文は、わたしの常盤野への思い入れを理解して投稿をすすめてくださった、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の重田真義先生や国立歴史民俗博物館の吉村効子さんに丁寧に何度も添削していただいたおかげで完成しました。投稿にあたっては、京都大学東南アジア研究センターの田中耕司先生にも大変お世話になりました。

最後に、土にさわって作物を育てることを知らなかった私に、農繁期にもかかわらず手取り足取り農業のことを教えてくださったSさんはじめ常盤野のみなさんに心より感謝いたします。

## 参 考 文 献

青森県農林部農地調整課

1976『青森県戦後開拓史』

青森県地域社会研究所・編

1986『青森県農業の展開構造』

熊田恭一

1980『土壌環境』学会出版センター。

工藤慶治・編

1976『東奥年鑑1977』東奥日報社。

輝岡衆三

1996『日本農業のあゆみ』有斐閣ブックス。

徳野貞雄

1997『『村おこし』の原型から学ぶ(大分県大山村)』鈴木廣・木下謙治・三浦典子・豊田謙二編『まちを設計する』九州大学出版会。

中尾重一

1983『樺太：開拓と市町村民史』札幌(私費出版)。

原 剛

1994『日本の農業』岩波新書。

蓮見音彦

1990『苦悩する農村』有信堂。

平松守彦

1990『地方からの風』岩波新書。